

イタリア・ルネサンス史をどう捉えるか

家田 義隆

まずこのルネサンスという言葉ですが、これはルネサンス時代の芸術家たちの伝記をかきました有名なジョルジョ・ヴァザーリが(ヴァザーリはミケランジェロの弟子で画家としては二流ですが)、「チマブエ以来古代の美と壮大さを復活した絵画が、野蛮なゲルマンのゴシックのあと始まった」として、この復活・再生という意味で *rinascità* とするイタリア語を使ったところから来ている言葉であります。このリナシタという言葉がその後フランス語で *renaissance* と表現され、ヨーロッパに広がったわけですが、当初は復活するとか再生するとかいう意味で使った言葉であった訳です。言葉としてはヴァザーリが最初に使ったのですが、こういう復活するとか再生するとかいう考え方はヴァザーリが最初ではなく、14世紀ころからイタリアでは広く行き渡っていたものでした。例えばレオナルド・ブルーニ(ブルーニはフィレンツェの書記官長であり、有名なウマニスタでしたが)、「ペトラルカこそ失われ死に絶えていた古の文学の優雅さを認め、それを再び明るみに呼び戻した最初の人であった」と書いていますし、ボッカッチョはデカメロン6日目の第5話で、「ジョットによって絵画が復興した」と書き、年代記作家フィリッポ・ヴィラーニは、「詩は名誉もなく尊敬されることもなく墮落していたが、偉大なダンテは暗い淵からこれらを光の中に呼び戻し、自らの手で衰滅していたこの芸術を立ち上がらせた」。あるいはウマニス

タとして名前のあったマッテオ・パルミエーリは、「遠い祖先の貴い成果が忘れ去られ、それ以後その成果に達することが不可能になった。それがようやく当今になって暗やみから救い出され、天才たちの手で呼び戻されてきた」、などにみられるものです。14世紀から15世紀はじめころ、絵画とか詩、散文の復興ということをやイタリア人は強く感じ、前代とは違って来た意識していたのでした。こういう考え方をヴァザーリは、『ルネサンス芸術家列伝』の中で明瞭に表現した訳です。彼の場合は美術の復興という意味だけに使ったのですが、その後この言葉がフランスに入り、ルネサンスという言葉に訳され、17世紀から18世紀にかけて美術のみでなく、もっと広い人間の生き方の変革、時代全般の更新という意味にも転用されてくることになりました。たとえば17世紀末から18世紀のフランスの啓蒙思想家の一人であったピエール・ペイルは、中世の野蛮に対する啓蒙的な反抗運動としてルネサンスを捉えたのでしたし、ヴォルテールもほとんど同じ考え方で、近代的進展の証としてルネサンスを見た訳です。イギリスのギボン、ドイツのヴィンケルマン、有名なフランスの小説家のスタンダールなどもルネサンスという言葉を使って、中世の蒙昧さからの脱却と、理性的人間的な新文化の開幕を叙述し、時代全般の更新の時代と見た訳です。こういう捉え方をとり入れて、16世紀の西ヨーロッパ史を概観したのがフランスの歴史家

ジュール・ミシュレでした。彼が1858年に刊行した大著(これは大変長いものですが)、『フランス史』の第7巻に「ルネサンス」という副題をつけて、16世紀を概観した訳です。彼によりますとルネサンス時代とは「世界と人間の発見」の時代でした。16世紀の西ヨーロッパを「世界と人間の発見」の時代として総括できるとしたのです。地理上の発見や、コペルニクスからガリレオ時代の天体の発見に、世界の発見を見、セルヴェトゥスやヴェザリウスによる人体の解剖学的解明、ルター、カルヴァン、ラブレ、モンテーニュ、シェークスピア、セルバンテスらによる人間精神の探究に人間の発見を見たのです。そしていよいよこの後、西洋史の中にルネサンス時代を定着させるに至った学者が出てくる訳です。ご存じのスイスの歴史家ヤーコプ・ブルクハルトでした。ブルクハルトはその名著『イタリア・ルネサンスの文化』(1860年)の中で、ヴァザーリや人文主義者たちの“文芸の復興再生”という捉え方、ミシュレの“世界と人間の発見”という捉え方、啓蒙主義者たちの“時代全般の更新”という捉え方などを継承し、もっと広げて総括し、古典学説のもとを作り上げた訳です。彼によりますとルネサンス時代は、「世界と人間の発見」の時代であり、ギリシャ・ローマの「古典古代の文芸の復興」の時代であり、「作為」の時代(計算され、考えられた作り物としての国家、ゲームとしての戦争など)であり、「現実主義と個人主義」の時代であり、「無道徳と宗教的無関心を基調とする」時代でした。それは中世とははっきり区別される、時代全般が更新された近代の始まりでした。中世では人々はヴェールに覆われたような状態の中で、半ば夢み、半ば目覚めた、まどろみの中にいた。ところがこの時期イタリアではこのヴェールが取り払われ、明確な意識のもとにこの世のこと全てを客観的な対象として扱うことができるようになった。この優れたイタリアの民族精神が古典古代と一緒にあって、ルネサンス時代という新時代をほかのヨーロッパに先がけ、

ヨーロッパの長子として生み出したのである、と捉えたのでした。以後ブルクハルトのルネサンス観が受け容れられ、補強され、定説となってきた訳です。例えばそうした補強した作品として、ジョン・アディントン・シモンズの「イタリアにおけるルネサンス」が1875年、ガイガーの「イタリアとドイツにおけるルネサンスと人文主義」が1882年、ブランディの「フィレツェとローマにおけるルネサンス」が1899年に出版され、古典学説として20世紀初頭まで定説になって来たのでした。

しかし19世紀末から20世紀初頭にかけて、古典学説に対する反論、疑問が提唱され始めました。19世紀の歴史学の進展とロマン主義や民族主義の高揚に刺激され、中世史の研究が進んだことが大きな原因でした。それまで中世は暗黒の時代として顧みられなかったのですが、新しい研究は中世が単なる暗黒の時代ではないことを明らかにし、ブルクハルトのルネサンス観の欠点が少しずつ浮かび上がって来たのです。その欠点とは第一に、あまり静態的な完成してしまったルネサンス観に対してでした。第二に、14世紀から16世紀のイタリアのことと、時間的空間的に限定し過ぎていることに対してでした。第三には、中世に対して近代を強調し過ぎたことに対してでした。第四にはヨーロッパ諸国との対照が強すぎたことに対してでした。これらの点について批判したのが根拠論者と称される学者たちで、古典学説のあげるルネサンス期の特徴のいくつかを中世の中に見つけ出し、またルネサンスとはイタリアだけの現象ではなく、中世ヨーロッパから生まれたもの、全ヨーロッパ的なものであると批判したのでした。その最初の作品がイギリスの文芸批評家であったW. ペイターの「ルネサンス」(1877)で、中世の恋愛物語の中に古典学説のいう現世的な人間の感情を見いだしたのでした。またH. トーデの「アッシージのフランチェスコとイタリアにおけるルネサンス芸術の開始」は、聖フランチェスコの生涯に、個人の内面からほとぼり出る人間と自然への素朴で飾

らない、優しい感情を見いだし、これこそルネサンスの源だとしたのでした。そのほかノイマンやブルダッハがこの根拠論者の学者たちです。ギリシア・ローマの文学の復興に関しましては、ハスキンスが「12世紀のルネサンス」(1927)で、すでに12世紀から13世紀にイタリアでなく、フランスでローマ古典の復興再生は始まっていた、と主張したのでした。ジルソンやブーランジェもこれを補強する研究成果を出しました。スウェーデンのノルドストレームの「中世とルネサンス」(1933)は極端にその考え方を標榜したもので、「イタリアにはフランスで達成された以上のものは何もない」、としたのです。宗教的無関心の時代であったという見方については、ワルザーが「ルネサンスの世界観」(1920)という本を書いて、古典学説が主張するほど宗教を無視した時代とは言えない。むしろカトリック教会に忠実な人々がほとんどであったことをイタリアのウマニスタの研究を通して強調したのでした。

こうして古典学説を批判し修正し、時にはルネサンス時代の存在を否定するような状態が出てきたのですが、その中から古典学説の批判のいくつかを認めながら、古典学説を修正し、さらに総合しようとする学者が現れた。その代表がオランダのホイジンガです。1920年に出版しました「ルネサンスの問題」で、それを検討したのです。彼はルネサンスと中世を古典学者のように截然と区別せず、ルネサンスの中に中世的なものと近代的なものとの並存を認め、古典学者と根拠論者の両者とも認める道を開いた。多様な姿がルネサンスで、一様に近代とか中世とか定義できないとする複数主義の見方でした。ホイジンガは別として、この見方はややもするとルネサンスを中世から近代に至る過渡期と見る見方に進んでいく危険をもつものでした。事実その後ファーガソンなどがその代表的論者になるのですが、過渡期としてしまうとルネサンスの独自性は中世と近代の両特徴の中に消えてしまって、結局ルネサンス時代はなかった、と

いうことになってしまう訳です。

こういう傾向に対し、この戦後40年ばかりの学説史の流れは、根拠論者の批判修正を充分考慮にいれながら、なお中世と異なるルネサンス時代があったと考える学説が現状では強いのではないのでしょうか。オスカー・クリステルラーやエウジェーニオ・ガレン、ハンス・バロン、フェデリーコ・シャボーやデニス・ヘイらが戦後を代表するルネサンス史学者ですが、若干のニュアンスの差はあっても、根拠論者の説く中世文化の諸価値を充分認めた上で、中世文化とルネサンス文化の間に内面的な価値転換の存在を主張し、ルネサンス時代はあった、としている。美術史学者のエルヴィン・パンノフスキーも、中世の描き手とルネサンスの画家の描き方には明らかに質的な差があることを主張している。こうして戦後の学説史はルネサンス時代のあったことを論じているのですが、大体彼らの活躍したのは1950年から70年代にいたる20年間ほどで、その後70年から今日の90年までの20年間はルネサンス史学史に一時期を画するような作品は書かれておりません。そろそろ出る頃ではないでしょうか。

次に、では私自身はルネサンス時代をどう捉えるか、というのに答えるのが順序ですが、極めて常識的な結論にならざるを得ないのであります。やはり14世紀に始まった。そしてブルクハルトが言うようにまず第一にイタリアで始まったイタリア的なものである。産業革命がイギリスで自生的に起こったように、ルネサンスはイタリアで自生的に生まれ、あとヨーロッパ諸国に伝播していったものであると思うのです。この14世紀イタリアではローマ教皇がフランスのアビニョンにつれ去られ、神聖ローマ皇帝の権力が弱体化して、イタリア諸国家を統治することが困難になる中で、束縛を離れたイタリア諸都市は自由に羽搏ける時がきた。司教代理をしながら居座ってしまって君侯になってしまう者、皇帝から爵位を買い取って国をつくるもの、傭兵隊長から成り上がる者、前代からつずいてきてい

た共和政都市国家など、いろいろの小国が競い合う時代がきた。それらは小国とはいえ、独立の国家で、お互い戦い、協定を結び、外交関係を進めた。そのためには外交文書を書く必要があり、その文例が当初はローマの文書だった訳です。古代ローマの歴史の本や、詩、道徳哲学の本を読み、それらを材料に美しく書くため修辞学を学び、正確に書こうと文法学を学んだのです。また各小国での行政機関の整備は役人や秘書官や法律顧問を必要とし、公文書の作成や行政長官や高位聖職者の演説のための文章作成に同じ古典を材料に使った。あるいは公証人の盛況は同じ教養を必要としたのでした。ここからローマ古典の研究が、これがルネサンス・ヒューマニズムですが、進んでくるのです。たしかに根堀り論者の言うように12世紀のフランスでローマ古典の復興は始まっていたのですが、重要なことは12世紀の古典の読み方は、中世の精神の読み方である。キリスト教のために聖職関係者が読んでいたのですが、14世紀のイタリアではキリストの栄光とかキリスト教の称賛のために読んだのではない。もっと世俗の必要のために材料に使ったということです。質的に別の復興があったのだと言えるのだと思います。こういうたくさんのヒューマニズム運動をする人々、この人たちは俗人がほとんどでしたが、こういう世俗の人々の中で、少数の天才が新しい思索を始めたのです。キケロなどを読むうちにキケロの主張する実践の重視ということに気がつくのです。それまでは清貧、観想生活、聖人の生活というのが正しい生き方でした。けれどもこれに対する迷いが生まれてきたのです。この世でこの世のためにつくすのが本当の人間の生き方ではないか。活動生活の評価を知ってくる。これに一番はじめに気づいたのがフランチェスコ・ペラトルカでした。彼の場合はまだ迷っている。ヴォークリエーズの谷間に移り住んで観想生活をしてみたり、アビニオンにでて教皇庁に勤めてみたり、ミラノ公国にでてみたり、と観想と活動の生活の相方にゆれて一

生迷っていましたが、それにしても観想生活が絶対正しい生き方であるという、それまでの生き方を離れてくる訳です。ここにルネサンス時代の開幕を思う訳です。およそ1330年代ということでしょう。絵画ではちょうどジョットが活躍するのがこの前後のことです。やはりこの頃にルネサンス時代は始まったなと思う訳です。これからはこの活動生活の重視が年とともに重みを増してくることになります。公的な場で活動するには、例えば政治でも経済でも文化でも、自由がなければならぬ。だから自由がよりあるところから活動生活が秀れているという考え方が唱導されました。より自由のあるところは当時のイタリアでは君主国ではなく共和国でしたから、例えばフィレンツェなどでもっとも早くもっとも徹底的に活動生活の称賛が行われた訳です。14世紀末から15世紀の70年代まで、およそ80年ほど徹底的な活動生活の優位がフィレンツェで唱導されました。それがシヴィック・ヒューマニズムと呼ばれるもので、この頃のウマニスタの言葉には、例えば「善に適った幸福な人生とは共同善のために参加する生活である。孤独や無為や瞑想だけの生活に入るとは人間の人間らしさを発揮させるものではない」とか「喧騒の中でその家族や近親者や祖国のために献身的に活動するのであれば主の思し召しにあわぬはずはない」とか「人間の仕事のうちで祖国の安寧に心を配り、都市を守り、人々を調和させるために活動することほどすばらしいことはない」のような言葉に表現されております。この頃の活動を称賛する文例はいくらでも出せます。清貧に生きることに對しては、富を積むことの許容、「商売に精を出せ」というのがこの時代の倫理でした。それで「富みを得、その富で家族を守り、都市を美しくし、神の栄えのために身をささげる余裕ができる。それが道徳的な善に人を導いて行くのだ」と。こういう考え方の中で、ローマ帝政の創始者カエサルに対する批判、断罪は声高に唱えられたのでした。公共の場で自由に活動するのを独裁政が妨げる

ことに対して発せられたものでした。こういう価値観が15世紀の中ごろローマ教皇庁へ、ついでヴェネツィア共和国へと拡がり、また宮廷を飾る教養として小君主国家、例えばマントヴァやフェラーラ、ウルビーノなどへ拡がって行ったのでした。ミラノやナポリやサヴォイアのような当時のイタリアの中では大きな君主国へはなかなか浸透して行くのは困難でした。当然です。君主権の強いところでは政治に自由に参加するとか、政治を批判するとかいうことは困難だったからです。

こうして共和政国家を中心にルネサンスは拡がって行ったのですが、この頃のイタリアの政治史をふり返って見ますと、この頃のイタリア政治史は着実に共和政の没落へ向かって進んでいたのです。君主政(シニョリーア)への道をたどっているのです。君主政への移行はルネサンスの価値観を変容させて行きました。例えば共和政の代表であるフィレンツェの歴史などに典型的に見られるのです。12世紀から15世紀の初めまでの共和政による政治は、15世紀の中ばコシモ・デ・メディチの頃から共和政は維持しながら徐々にメディチ一門での権力掌握、政権の一人占め、一人占めとは言わなくとも権力壟断の方向へ向きを変えコシモの孫の大ロレンツォの頃には身分は一介の市民でありながら実質的には無冠の君主になってしまったのでした。政治の自由と言ってもある党派に属するものの自由になってしまったのです。15世紀の70年代からです。こうして活動生活の称賛は徐々に消えかかってくるのです。活動生活より瞑想生活の重視が圧倒しだすのです。例えばそういう雰囲気、「公共生活に役立つとはどういうことかと問われれば、賢人はあれこれの実際的な活動から遠ざかり、公的、私的な問題を避けて […] 自分だけの世界で探求し、精選しながら著述することです、と答えることになろう」と、俗世間から遠ざかって文筆に専念することが、人生の正しいあり方であると書き、また「真の知識を得るためにも、道徳上完全なものになるためにも、人みななすべきこと

は瞑想生活である。 […] 真に人間らしい世界とは瞑想生活である」とか言うようなウマニスタの声が代表しているものです。こういう流れをネオプラトニズムといますが、そのネオプラトニズムの時代に入ったのです。この時代にはウマニスタ文化人はシニョーレの廷臣になり、食客になって君主に丸抱えされる存在になっていったのでした。当然批判の自由を失ってゆくことになったのです。経済活動から撤退してコンタードに土地を買い、商売から引退して行くのもこの時代の傾向でした。15世紀の終わりから急速にイタリアのルネサンス活動は方向転換を始めたのでした。

イタリアではこうして方向転換をし、ルネサンス活動は活力を失って行くことになったのですが、一方ではアルプス以北の国々へイタリア・ルネサンスは流れ出ていったのです。イタリアのように自分からルネサンス運動を起こしたのではなく、イタリアから高い文化の流入が始まってきました。その時流入したイタリアのルネサンス文化は、15世紀末の君主政と折り合いをつけている、変容した文化でした。中央集権化の進み始めていたフランスやイギリスの宮廷は、共和主義的な思想はまだ夢想だにできるものではありませんでした。宮廷貴族の身だしなみ、教養として受け入れられていったのです。カスティリオーネの「Il cortegiano」はその風潮におあつらえ向きの本で、アルプス以北の国々では大流行した訳です。こうしてアルプス以北では17世紀までルネサンスは続くのです。

以上まとめてみますと、

ルネサンスは14世紀の前半に始まり、そのルネサンス的価値観を成長させ、16世紀にはその価値観を失っていった。ブルクハルトの言うように、14世紀から16世紀まで典型的なルネサンスの姿が写真のようにそのままあったのではない。初めがあって、高揚し、没落して行った。そしてイタリアでルネサンス時代が終るころその伝播によってアルプス以北ではヨーロッパ各国のルネサンスが花開いたのである。時代的に見れば、14世紀という中

世の時代に始まったもので、中世的なものが残存しているのは当然なことでした。そういう中世が残存する中で、中世とは異なるものが作り出され、生み出されてきたのです。そういうものを生み出す根源が、ルネサンス的価値観であったと思うのです。具体的には活動生活という生き方です。そこでルネサンス的価値観を何が生み出してきたのかが問われねばなりません。ここにイタリア的なものが非常に係わっていると私は考えるのです。14世紀ころのイタリア社会のあり方が大きな意味をもっている。どういうことかともうしますと、この時代アルプス以北の中世世界を見ると、貴族が領主として治め、裁き、年貢を徴収し、戦争をし、世俗の世界の一面をとりしきっている。彼等はほとんど全部田舎の領地に住み、戦争を除き、社会的交流なしに閉じ籠って一生を終っている。ところがイタリアでは例えばフィレンツェを例にとりますと、貴族たちは12世紀ころから田舎を捨てて都市に移住してきている。強制的に移住させられた家も、自発的に移住してきた家もあるのですが、都市に大量に移っている。そして貴族は時代と共に平民に同化して行く。14世紀の初めころ、私がルネサンスの開始のころと考えるころには、アルプス以北のような貴族とは大きく異なる貴族社会が出来てくる。貴族と平民は一緒になって都市の政治に参加し、商売をし、学問をし、芸術の世界に入っている。確かに数世紀前には貴族の出で、その出自を誇ろうとするのですが、社会の現実の場では、平民の有力者と同等になっている。平民の中でも上層の平民から中層や下層の平民に落ちる者、逆に上がるものがある。金貸しとか遠隔地貿易など危険の大きい経済に依存していたからです。要するに相当の社会的階層移動がある。アルプス以北ではこの時代社会層はほとんど変わらない。一定のオルドル (ordre) が固定している。ソーシャル・モビリティを閉ざしている。こういう移動がエネルギーを生み出している。こういうエネルギーがルネサンス的価値観を生み出したもの

だと思うのです。もう一つは12世紀ころからイタリアでは、ある程度の教養をもった層が大量に生み出されてきたことです。前に述べましたように、役人や秘書官や法律顧問や公証人など、さらに子供に読み書きソロバンを教える教師など、聖職者によって俗人が、いろいろの分野である程度の教養を身につけて社会で活動しているのです。14世紀の商人などの中には、ただ金儲けだけをするのでない人物が出てくる。簿記をつけ、損益勘定をつける同じペンで、年代記を書き、詩をつくり、小説にも手を染める人まで出てくるのです。例えばディノ・コンパーニ、フランコ・サケッティ、ジョバンニ・ヴィラーニなどです。アルプス以北の国では16-17世紀までちょっと考えられないことなのです。

こういう社会が一度ルネサンス的価値観に目覚めるとそれを育み、育てる土壌になったのでした。そういうイタリア的なものがルネサンスをイタリアで自生的に生み出したのです。こういう価値観が一世紀半ばかり続いて、15世紀の70年代から急速にしばみ始めたのは前に述べたとおりでした。シニョリーア制になるにつれて社会階層は固定し、そのうえ1494年からは集権化の進んだ大国スペインやフランスがイタリアを餌食にし始めるのです。こういう大国の侵入に敏感に反応したのが例えばマキャヴェリでした。蛮族を追い払え、そしてイタリア統一をと叫んだのはこういう状況に対してでしたが、文化的には高くても小国で弱体の、分裂したイタリア諸国にはその危機が認知出来ず、口先だけ巧みな手紙を書いたり、機知に富んだ受け答えで何とかその場をやりすごすことしか考えなかったのです。だがもうそんな時代ではなかったのです。フランスやスペインは容赦なくイタリア侵略を進めました。イタリアの小国はある時はフランスとある時はスペインと同盟先を変えながら、結局は従属の道を歩いたのでした。そして1527年のローマ掠奪事件以後、イタリア各国はスペインの支配下に入ってしまった訳です。ヴェネツィアを除いてほとんどの共和

政国家はイタリアから消えてしまいます。
1530年代がイタリア・ルネサンスの終わりであつたと思います。

あとがき

本稿は1990年岐阜高等学校社会科研究会で講演したものの、最初の挨拶と最後のお礼の文言を除いた、本文をそのまま掲載したものである。

参考文献

- M.Ciliberto, *Il rinascimento, Storia di un dibattito*.1988
W.K.Ferguson, *The Renaissance in Historical Thought*.1948
P.O.Kristeller, *The classics and Renaissance Thought*.1955
W.J.Bowsma, *The Interpretation of Renaissance Humanism*.1959
H.Baron, *The Crisis of the Early Italian Renaissance*.1966
Ed.by T.Helton, *The Renaissance. A Reconsideration of the Theories and Interpretation of the Age*.1964
D.Hay, *The Italian Renaissance. In its Historical Background*.1961
E.ガレン、清水純一 訳「イタリアのヒューマニズム」
J.ホイジンガ、里見元一郎 訳「文化史の課題」
西洋史論1「ルネサンスの研究」
森田鉄郎「ルネサンス期イタリア社会」